大阪府保育士会だより

ほほえみ

平成26年12月1日
第99号
大阪府社会福祉協議会
保育部会・保育士会
大阪市中央区中寺1-1-54
TEL 06-6762-9001

「子どもが豊かに育つ保育の実現をめざして～」
第48回全国保育士会研究大会開く
「手洗い」は自然に身に付け習慣化　生きる意欲高める食事の大切さ
―第5分科会で大方教授が助言

『子どもが豊かに育つ保育の実現をめざして～つなげよう笑顔！輝く未来へのかけはし～』をメーンテーマに、第48回全国保育士会研究大会が10月16、17日の両日、香川県高松市のサンポートホール高松で開催されました。

初日の行政説明では、厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課幼保連携推進室長の南新平氏が①幼保連携型認定こども園教育・保育要領②保育士資格のみ有する者の幼稚園教諭免許特例取得③公定価格における保育士処遇改善―の3点について説明しました。

また、記念講演では、『子どもたちへの贈り物』と題し高松市出身のバイオリニストで作曲家の川井郁子氏が諸外国での社会的活動の体験や、自身の出産・育児を通して自己肯定感を持つことができたエピソードなどを紹介されました。

2日目は10の分科会が開かれ、『子どもの育ちから健康、安全を考える』をテーマにした第5分科会では、山形県のあおぞら保育園が『子どもの清潔への意識を育てる』、また、神奈川県保育士会保育内容研究会は『楽しく食べる力を育てましょう』と題し、それぞれ発表されました。

助言者の大阪総合保育大学児童保育学部学部長の大方美香教授は「手洗い」について、「子ども自身が当たり前のこととして自然に身に付けていくことが大切。人との関係を通じて『気持ちいい』『すっきり』という心情が育つもので、感染症防止という事実とともに『保育の心』を忘れていけません」と述べられました。

大方美香氏

「食事」は、五感と人との関係性を通した「おいしい」「うれしい」「あまい」「おなかがすいた」といった心情が満たされることで、生きる意欲が高まります。

また、発達との整合性を見極め、外から見える問題だけではなく、身体内部の様子に目を向けることも保育士に求められる専門性であると締めくくられました。

なお、全国保育士会研究大会の次回開催地は千葉県で開催されます。

（東大阪市　N・Y）

熟練者は保育士のよきモデルに安心して働ける環境づくりを
―保育所におけるスーパービジョン（人材育成）」テーマに連続研修会―

保育士の専門性を高める連続研修会（園長・リーダー・主任研修会）第3日目が8月29日、大阪府社会福祉指導センターで開かれ、和泉短期大学特任教授の杉山佳子氏が「保育所におけるスーパービジョン」をテーマに講義されました。（第1日目は98号掲載）

杉山佳子氏

スーパービジョンとは人材育成で、「スーパーバイザー（熟練した保育士）が、スーパーバイジー（経験が浅い保育士）に、よりよい実践ができるよう指導や支援を行うこと」です。「保育者がその人らしく主体性をもって保育できるように」指導だけでなく、一緒に側面的な支援で成長をサポートしていかなければならないということです。

杉山氏によると、主任保育士としての役割は、①職場環境を整え、保育士が安心して働けるようにすること②保育士としてよきモデルになること③保育士の専門性の向上をサポートすることーであり、援助していく中で「相手に解決する力がつく」ということが重要です。

そのためにはまず、「相手のありのままの姿を受容し、理解する」ことが大切で、それによって「相手は安心・安全感をもち、自分のありのままの姿を見つめることができる」ということです。その結果、「自分で決めて解決・決定（自己決定）」されると強調されていました。

家庭環境の変化、生活の多様化に伴い、園児の家庭支援、地域の子育て家庭への支援も求められています。保育士は専門職としての自分をまず見つめ（自己覚知）、相手の言葉と思いを聞くだけにとどまらず、その先の事実と思いに寄り添い、援助していく必要があると述べられました。

講義を踏まえ、ロールプレイングが行われ、聞き取り方やうなずき加減、言葉の間合いなど、普段意識しない行動や言動が相手にどのような印象を与えているかなど話し合い、スーパーバイザーに求められる知識・技術・態度などの理解を深めました。

（東大阪市　M・K）

子育て支援シリーズ41

多彩なメニューで支援の「わんぱく・くらぶ」

乳児、幼児各コースで年各４回実施

赤ちゃん訪問従事者が家庭訪問も

堺市　鳳西保育園

堺市にある鳳西保育園の地域子育て支援事業は事業開始20年を迎え、多彩な活動を展開されています。

現在の取り組みは「わんぱく・くらぶ」として園庭開放をはじめ盛りだくさんなメニューを準備。さらに「子ども動物園」や「子どもだんじり曳き」などの園行事に一緒に参加し、楽しんでもらう活動です。

園庭開放は毎月1回、地域の子育て家庭に来園を呼びかけ、園庭や園内にある第二園舎（遊びの家）で遊んでもらい、お母さんのさまざまな相談にも応じます。

「わんぱく・くらぶ」は1年を前期、後期の2期に分け、1期ごとに乳児コース・幼児コースをそれぞれ4回行っており、たいへん好評で多くの方が利用されています。メニューとして、乳児コースでは①交流会とお話シアター②保健師さんからの話と保育士によるベビーダンス③3B体操④グループ交流と修了式―が行われています。

幼児コースでは、歯科衛生士に歯の話や指導をしてもらったり、手作りおやつの試食会、乳幼時期に必要な運動・遊び、食育を伝えるのも活動の一つ。

4回とも同じメンバーで楽しむことができるので、親子ともども友だちづくりの場にもなっています。お母さん方の関心事でもあるトイレトレーニングの進め方、どんな玩具を与えたらいいのか、といったことを知る機会となり、「楽しかった」、「また利用したい」などのうれしい声が寄せられ、そんな声が職員の励み、活力となっています。

何度か足を運ぶうちに、保育園の門がくぐりやすくなるようで、「わんぱく・くらぶ」終了後も相談を受けたり、保健師と連携しながら適切な関係機関を紹介し、スマイルサポーターの活動にも繋がっています。

堺市の保育園では「こんにちは赤ちゃん訪問従事者」の資格を持つ保育士が、小学校区の生後2カ月までのお子さんがいる家庭を訪問。それが園を知るきっかけとなり、「わんぱく・くらぶ」への参加に繋がるケースもあるようです。

分園では親子カフェを開設予定で、ここでも育児相談員の役割を果たされるようです。

保育園は地域の方が足を運びやすい場となることが必要ですが、園庭開放などに参加しにくい方への支援をどのように展開していくかが課題の一つ。今の社会に対応した、地域に根差した子育て支援を考え、実践されている意気込みがうかがえました。

（堺市　H・K）

自尊感情を育てる生涯学習プロジェクト

大葉氏が独自の「誕生学プログラム」を紹介

保育士研修会

大葉ナナコ氏

保育士研修会が9月22日、大阪国際交流センターで開かれ、「誕生学『生まれてきたことが嬉しくなると、未来が楽しくなる』～自己肯定感を高める取り組み～」をテーマに、公益社団法人誕生学協会代表理事の大葉ナナコ氏の講義が行われました。

大葉氏は、自身の5回の出産と育児経験をもとに、「誕生学」と名付けた独自の「自分のいのちを知る授業」を伝える活動を続けてこられました。

誕生学とは、未就学児、小学生、中学生、高校生、大学生、さらに成人のそれぞれの年齢ごとに「自分がどんな風にお母さんのお腹の中で成長してきたか」「自分自身の産まれてくる力」などを伝え、いのちの真意を再認識することで、自尊感情の高まりをめざす生涯学習プログラムです。

大葉氏はまず、年間約3万人もの人が自殺し社会問題化していること、中でも未成年者の自殺率が増え、児童生徒の自殺が約百人という報告がされていること、日本青少年研究所の調査では、日本の子どもたちの「自己肯定感」が、他の先進国の子どもたちと比べ極めて低いという調査結果を紹介。

さらに、「妊産婦死亡率が世界一低い、恵まれた医療環境の中にある日本の子どもたちですが、小学生の約35％が『自分は生まれてこなければよかった』と思う時が頻繁にあると回答している」と述べられました。

そのうえで、誕生学プログラムにふれ、同プログラムを受けた子どもたちの感想に「自分ってすごい」といった自己を肯定的に受け止める内容が多くみられたことや、中・高校生になると、「いつかいのちを繋ぐかもしれない自分の体をもっと大切にしたい」という、セルフケア意識の高まりがうかがわれるようになったそうです。幼い子どもたちの描く自画像も、しっかりした輪郭で、表情豊かなものに変わってきたと強調されました。

大葉氏は最後に、「保育士のみなさん、ぜひ子どもたちに、生まれてきてくれてありがとう、あなたの未来が楽しみだよ」のメッセージを伝えましょう、と参加者に呼びかけられました。

（泉大津市M・M）

学びシリーズ30

伝えたいことが伝わるお便り作り③

保育の安全研究・教育センター代表
掛札逸美

●リスク・コミュニケーションの大切さ

「リスク・コミュニケーション」という言葉を聞いたことがおありかと思います。事業や活動において予測されるリスクと対策について、事前に関係者に伝え、関係者と相互に情報交換をしていく過程を指します。

どんな事業や活動も、価値と同時に必ずリスク、コストを伴います。保育でも、価値だけではなく、そこに伴うリスクもきちんと保護者や地域住民に伝えていくことが大切です。

子どもが集団で元気に過ごす以上、ケガ、かみつきやひっかきなど、保育にはさまざまなリスクがあります。こうしたことについても子どもの育ち、保育の価値とあわせて、入園当初や新年度の始まりの時、保護者に伝えましょう。

「起きる前にわざわざ伝える必要はないんじゃない？起きてからちゃんと説明すれば…」。起きてからでは手遅れです。

例えば、かみつきが何度か起きた後、かまれた子どもの保護者に「これは、育ちの中で当然起こることです」と話しても、「なに、言い訳して！」と思われてしまうでしょう。人間は、感情的になっている時に理屈や説明を聞いても納得できず、いっそう感情的になりがちです（心配な時や困っている時なども同様です）。

一方、1歳児進級の時、または0歳児の途中の保護者会でかみつきやひっかきのリスクに先んじてふれ、「成長の過程には当然あることなので、ご理解ください」と言っておけば？　冷静な時に聞くと人間は納得しやすく、後にかみつき、ひっかきが起きても「あの時、言ってたな」と冷静に思う傾向があるのです。

●感染症について流行前に伝える

冬の時期、リスク・コミュニケーションで最も重要になるのが、感染症です。

「園でうつされた」「対策はしているのか」と言われる、まだ感染力がある期間なのに、具合が悪いのに預けてくる…、保護者からの意見や質問も増える時期です。こういう時こそ、流行が始まる前にリスク・コミュニケーション！です。園だより、クラスだより、掲示、連絡帳、すべての媒体を総動員しましょう。

基本は媒体によらず同じなので、ここでは掲示を例に挙げてお話しします。

①流行が始まる前に

感染症と診断された子どもが自園で1人出た、または近くの園で出た、この機会を逃すことなく伝えることが必須です。蔓延してからでは手遅れです。

②ひと目でわかるタイトル

掲示のタイトルを「お願い」や「ご注意」にしていませんか？　これでは保護者の目をひきません。掲示のタイトルも園だよりの見出しも、「ひと目で内容がわかるもの」に。もちろん、大きな文字で。

「○○感染症が近隣で流行し始めました」「2人のお子さんが○○感染症と診断されました」「今週の感染症情報」など、タイトルを見ただけで、内容がパッと見てわかること。予防や対策に熱心で保育園に協力的な保護者なら、このひと言だけでメッセージを受けとってくれるでしょう。

③自園の取り組みを伝える

タイトルの下に事実（例：○○感染症が流行し始めました）をひと言書いたら、すぐに自園の取り組みです。これが、保育園に対する保護者の信頼を高める鍵です。「うちの子の園は、こんな予防対策をしているんだ」と保護者がわかること。保護者の心に「安心」をつくる第一歩です。

ところが、掲示でもおたよりでもこの部分がすっかり抜け落ちて、感染症の解説ばかりを書いている園が大部分です。それは後回し。

まずは「当園では、子どもも職員もいつも以上に手洗い、うがいをしています」「玩具、テーブル、ドアノブなどの消毒を徹底しています」といった具体的な対策を書きましょう。

④保護者にしてほしいことを、具体的に

自園の取り組みを書かないまま、保護者に「ああして」「こうして」と書くと、「上から目線で命令をされている」という印象を残します。だから、自園の取り組みが先。その後に、保護者がすべきことを書いてください。

ただ、保育園として最も伝えたいのはここですから、自園の取り組みよりも字のサイズを大きくする、赤字にする、枠で囲うなどして目立たせましょう。

⑤「質問はいつでも」

ここで紙面に余裕があれば、感染症の解説を書いてもかまいませんが、なくても問題ありません。「え、どんな病気？」と思った保護者はインターネットで調べるでしょうし、そもそも関心がない保護者は、解説を書いたところで読まないからです（解説を書く場合は、引用元を明記すること）。

解説をごちゃごちゃと書いて読みにくくするくらいなら、③と④がしっかり目立つよう、全体のレイアウトを余裕のあるもの、目立つべき点が目立つものにしてください。

そして、最後は「ご意見やご質問がありましたら、いつでも園長、担任までお声がけください」。これは、「私たちの園は、いつでも保護者の皆さんの声を聞きます。なんでも話してください」という態度表明ですから、書き忘れないようにしてください。

おまけ：園内コミュニケーションも「風通し良く」して、保護者から何を尋ねられても一貫した答えが返せるようにしましょう！

「保育の工夫―現場を訪ねて―」

噴水回りでカーブ行進の練習
―姉妹園と合同運動会
“商店街保育園”だけどアーケードで快適な散歩も―八尾市　くねあ保育園―

八尾市のくねあ保育園は今年4月、同市の千塚保育園の分園としてスタートしたばかりで、0～2歳児の保育園です。乳児期に大切な「食べる・寝る・遊ぶ」の3点を基本に、

く：おいしく食べる
ね：安心して眠る
あ：のびのび遊ぶ

を保育目標に掲げ、子どもたちはほっこり、ほのぼのした雰囲気の中で過ごしています。

同保育園は商店街の一角にあるため、敷地内には園庭はありません。戸外で遊ぶには近くの公園や神社に出かけ、遊具に乗ったり、砂場で遊んだり、かけっこをします。

しかし、利点もあります。商店街にはアーケードがあるので雨の日は濡れずに散歩。商店街のお店の方と顔なじみになり声を掛けられるようになったそうです。子どもたちも挨拶をしたり手を振ったり、散歩を楽しみにするようになりました。

身体を動かしたり走り回ったりする運動には場所が限られているのですが、本園の千塚保育園と交流を図られ、三輪車乗りやボール遊びなど園庭で遊ぶ機会を作られています。また、本園との交流は、多くの友だちと関わるよい機会にもなり、顔を合わせると名前を呼び合うようになっているとのことです。

姉妹園との合同運動会（10月2日）では、入場行進でトラックに沿い歩きますが、円周を歩くという機会がない子どもたち。初めて行進した時、カーブを歩くことが難しく列が乱れてしまったそうです。そこで、散歩コースにある円形になった噴水の周りを歩いてみたところ、子どもたちは少しずつ感覚をつかみ、友だちの後ろについて歩くことができるようになりました。運動会本番では、大勢の人たちが見守る中、緊張しながらもしっかりと歩くことができたそうです。

公共の場で遊ぶ際には、安全面や衛生面など注意しなければならない点もありますが、子どもたちが楽しんで遊び、心身ともに健康に育ってくれるように、今ある環境の中で最大限の工夫をされている姿勢が印象的でした。（八尾市　K・N）

地域とともにふれあい大切に

園活動を知り見守ってもらう多彩な交流
摂津市　せっつ保育園

せっつ保育園は11年前に開園しましたが、以来、園のその年の取り組みに合わせ地域との関わりを深めてきました。

まず園生活のスタートである入園・進級式に、地域の自治会長、民生委員児童委員の方々に出席してもらい、新入園児の保護者に対し、地域と連携して保育することを伝えます。

また、お泊り保育・運動会・卒園式などには、見守りや出席をお願いし、クリスマス会のサンタさんは毎年自治会長さんです。

民生委員児童委員主催のふれあいサロンとも連携。敬老の日・ひなまつり・お花見などを一緒に計画し、地域のお年寄りの方を招いています。子どもたちからは歌や抹茶のお運び、民生委員児童委員からは大道芸など、毎年工夫して和やかな笑い声が絶えない会にしています。

そのほか市商工会議所の青年部さんには豆まきのオニ役になってもらったり、ボーイスカウトさんには夕涼み会の夜店を、近隣の方にはハロウィンに子どもたちが訪問する行事に協力してもらうなど、幅広い交流を実践しています。

園が地域のお役に立てることは数少ないのですが、消防署や警察署などお世話になっている方たちへ、子どもたちからお礼の絵や言葉を届けるほか、自治会やシルバー人材センターなどの行事に、子どもたちが出かけて行き、元気な歌や和太鼓演奏などを披露します。

日ごろ利用している隣接の広い公園では、自治会や市の障がい者施設のみなさんが定期的に清掃されていますが、月に2回、年長児がそのお手伝いをし、「ありがとう」の気持ちを伝えています。

園の避難訓練・防災訓練では、地域の子育て家庭にも参加してもらい、災害時に園を利用してもらうよう備蓄品の説明なども行っています。

このような活動や園の保育のようすは、毎月の園だよりを園外用として作成し、各自治会の回覧板に掲載しています。地域に園のことを知ってもらい、見守っていただくのが大切だと思っています。

（摂津市　S・K）

編集後記

今年もあとひと月を残すのみとなりました。年の初めに、今年はやりたいと思ったこと、頑張ろうと思ったことが、まだたくさん残ったままなのに…1週間、1カ月、1年間と、時の過ぎる早さには改めて驚き焦ってしまうばかりです。

27年度には、新しい制度がスタートすることになります。その取り組み方は園によって色々でしょうが、幼保連携型認定こども園教育保育要領の研修会もあちこちで開催されています。しっかり学び、より良い保育に備えたいと思います。

保育士会へのこの1年のご協力に感謝いたします。